

2017年8月、英国のテリーザ・メイ首相（当時）が日本を訪問した際に発表した「繁栄協力に関する日英共同宣言」に基づき、2019年から2020年にかけて日本と英国は共にスポーツ分野、文化・芸術分野などの幅広い交流活動を推進することに合意し、その取り組みの1つとして「日英文化季間 2019-20」が実施されている。今回の特集では、この日英文化季間における取り組みや日英の自治体間における交流事業などを紹介する。

〔(一財)自治体国際化協会ロンドン事務所〕

### 1

## 「日英文化季間」を通じた日英交流の促進

### 在英国日本国大使館広報文化班

日英首脳の合意を踏まえ、日本開催のラグビーワールドカップ 2019 と東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会を橋渡する形で、「日英文化季間 2019-20」が展開されている。

英国では在英国日本国大使館をとりまとめ役に日本を紹介する「日本文化季間」、日本ではブリティッシュ・カウンシルと駐日英国大使館をとりまとめ役に英国を紹介する「UK in Japan」の下、日英間の相互理解を深めるべく、さまざまな団体が多様なイベントを開催している。

英国においては、文化・芸術分野の交流、医療・科学技術・産業分野等におけるイノベーションや先端技術まで、今日の日本が有する多面的な魅力を伝え、また地域や草の根でこれまで行われてきた手作りの活動をさらに促進し、英国の方々の日本への関心を深め、また長期的に両国間に残るレガシーを創ることを目指している。

2019年9月にロンドンの一大名所であるトラファルガー広場で開催されたジャパン祭りでは、「日本文化季間」のグランド・オープニングが宣言され、さまざまな団体が日本の文化の実演・紹介を行い、また当館広報ブースでは全英で開催されているさまざまなイベントを

紹介した。昨秋は、ラグビーワールドカップを通じて英国における日本への注目が大いに高まり、「日本文化季間」への関心が寄せられた。著名な文化関連機関のみならず、草の根レベルでも、対日理解を促進するイベントが多数開催されていることは、英国において日本への関心が根強いことを意味しており、大変喜ばしく思う。2020年6月1日現在、750件以上の日本関連事業が「日本文化季間」の下で登録されている。

「日英文化季間」の旗艦プロジェクトの1つに桜プロ



ジャパン祭りにおける広報ブース



リージェンツ・パークにおける桜植樹式典

プロジェクトがあるが、本プロジェクトは、未来の世代のために良好な日英関係の遺産とするという趣旨に基づき、日本企業および邦人個人の寄付によって、6,500本の桜を全英400の学校および160の公園等に植樹するものである。昨年11月には、リージェンツ・パークで桜植樹式典が開催され、グロスター公爵殿下や長嶺駐英大使らが、地元の小学生代表とともに、桜の植樹を行った。新型コロナウイルスの影響により、英国においても外出自粛が続いているが、植樹した桜は今春早速開花し、困難な時代においても、着実に成長し、ロンドンの人々に希望を与える象徴となっている。来年にかけて、順次植



当館主催漫画自慢コンテスト受賞者発表レセプション

樹が行われる予定であり、英国人にとって、桜がより身近なものとなり、春を迎える度に、日本との結びつきを思い起こしてもらえる契機となれば幸いである。

読者の多くは、日本に在住しているかと思うが、前述のとおり、日本でもブリティッシュ・カウンシルと駐日英国大使館が中心となり、日英交流を促進するためのさまざまな取り組みが行われているので、是非御確認いただきたい。オンラインで実施できることも多々あるので、読者の皆様におかれても、日英交流の更なる促進のために、協力いただければ幸甚である。「日英文化季節」をさらに盛り上げていきたい。



当館主催茶道具展内覧会

独立行政法人国際交流基金 (The Japan Foundation) (基金) は世界の全地域において、総合的に国際文化交流事業を実施する日本で唯一の専門機関で、日本の友人を増やし、世界との絆をはぐくむため、「文化」と「言語」と「対話」を通じて日本と世界をつなぐ場を作り、人々の間に共感や信頼、好意を育てていく活動をしている。英国では基金設立の1972年よりロンドンに事務所を構え、英国における文化交流、学術交流、日本語教育振興の活動を行ってきた。

そのため、2019年から2020年にかけて行われる日英文化季節についても、これまで基金が行ってきた経験とノウハウを活かして、いろいろな事業を展開している。

2019年5月23日から8月26日まで、大英博物館で日本国外では最大規模となるマンガ展「The Citi exhibition Manga マンガ」が開催された。世界的に知られる多くのマンガ家の作品が展示されたほか、期間中にはアニメの映写会、マンガ家によるトークやシンポジウムなど、さまざまな団体による関連企画も開催された。



大英博物館で開催された「マンガ展」に合わせて開催したマンガに関する学術シンポジウムの様子 (2019年8月23日実施)

2019年9月には、ロンドンのトラファルガー広場で開催された「ジャパン祭り」(日英文化季節の公式オープニング・イベント)において、日本の島根県から石見神楽の一行を招へいし、舞台上で「大蛇」を上演した。当日は雨が降る中で、ギリギリまで上演できるか不安だっ

たが(「大蛇」は紙で作られている)、幸運なことに、3回のパフォーマンス時には雨も止んだりとすることで、無事に終えることができた。大変迫力のある上演で非常に好評だった。なお、石見神楽の一行はトラファルガー広場でのパフォーマンスに先立ち、ウェールズ地方のカーディフにあるNational Museum Wales、そして大英図書館でも公演を行ったが、どちらも多くの観客を得て大好評だった。特にウェールズでは、ちょうどラグビーワールドカップ2019日本大会開催に際し、ウェールズ・チームが日本で歓迎を受けたことがニュースに



日英文化季節の公式オープニングである「ジャパン祭り」の様子。あいにくの雨にも関わらず、多くの人々が来場した (2019年9月29日実施)



ウェールズのNational Museum Walesでの石見神楽の公演の様子。あまりの迫力に近くで見ていた子供が泣き出し、してしまうというハプニングも起きた (2019年9月27日実施)

なっていたこともあり、非常に現地で歓迎を受けてた。こうしたことで日英交流の絆が強くなっていくというのは、文化季節を行う大きな意義だと思う。

また、今回、基金では日英文化季節を通じて、将来の日英交流を担う青少年への事業に力を入れている。例えば、コベントリーでは、2018年3月に「Coventry Japan Young Ambassador Conference」という事業をコベントリー市内の小学校などと共催で実施した。これは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（東京2020大会）に向けて、コベントリー地域にある19校から250人の小学生が集まり、1日、日本文化・日本語・スポーツに関するワークショップに参加しながら、今後のそれぞれの学校・地域での活動について考え、彼ら一人ひとりがYoung Ambassadorとなって活動していくという事業である。この事業はその後も続いており、彼らの代表者10人が2019年11月に日本を訪問し、東京2020大会の会場を視察したり、2020年6月には、コベントリー市内各所でJapan Art Festivalの開催も予定されている。このイベントにおいて、Young Ambassadorの皆さんはいろいろと企画・運営に携わる予定である。また、基金も日本から書家の前田鎌利さんを招へいし、コベントリーの大聖堂跡地でストリート・パフォーマンスを行ってもらうことを予定している。コベントリーは第二次世界大戦の際に空爆を受け、大きな被害を受けた。そうしたことから平和構築を非常に重要に考えている。日本の広島などとも交流があるが、こうした活動を通じて、将来の日英交流、そして世界交流に結びつく事業となってくれることを心から祈っている。



英国の元パラリンピアンで、5つの金メダリストでもあるノエル・サッチャー氏による日本に関するクラス（2018年3月17日実施）



コベントリーに引き続いて、レスターで行われた事業。写真は全員でラジオ体操をする様子（2019年7月3日実施）



英国の車いすラグビーチームのコーチと選手が東京パラリンピックに向けての抱負等を児童に話した（2019年7月3日実施）

それ以外にも、例年行っている「国際交流基金日本映画巡回映画上映会」等を拡大開催するなど、さらに日本への理解を深めてもらい、日本の友人を増やし、世界との絆が深まるような事業を行っていきたいと考えている。

と、この原稿を執筆している途中で、英国でも新型コロナウイルス感染が拡大し、最初は大人数が集まるイベントができなくなり、美術館や劇場が臨時閉館となり、学校も封鎖、そして、2020年3月24日より、とうとう原則外出ができなくなり、都市封鎖に突入した。これにより、これから計画していた日英文化季節事業については、中止・延期等せざるを得ない状況である。この原稿を書いている段階ではまだ封鎖がいつ解かれるのか、また文化事業がいつからできるのかは不明だが、1日も早い終息と、また皆さんに文化事業を心から楽しんでもらえる日々が戻ることを心から祈って、この原稿を結びたい。

## 3

## 「UK in JAPAN 2019-2020」における日英交流

ブリティッシュ・カウンシル（文：榎本市子）

ブリティッシュ・カウンシルは英国の公的な国際文化交流機関であり、英国の文化芸術・クリエイティブ産業の創造性あふれる多様な取り組みを紹介するほか、日英アーティストや文化関係者間のパートナーシップを促進する活動から、英会話スクールや英国資格試験の運営、留学情報の提供、英語教員への教育支援など英語教育を幅広く支援する活動まで、多岐にわたり展開している。

そのブリティッシュ・カウンシルと駐日英国大使館が、日本でラグビーワールドカップが開催された2019年9月より日英交流年「UK in JAPAN 2019-2020」を展開し、アートや教育、ビジネスなどの活動を通して、日本と英国の絆をより深めるためのさまざまな活動を行っている。

特にアート分野では、日英のパートナーと共に展覧会やコンサート、演劇公演などの多様なプログラムを展開している。また、2019年10月には「伊勢市アーティスト・イン・レジデンス」を実施した。これはブリティッシュ・カウンシルと伊勢市の共同事業で、英国を拠点とするアーティストを伊勢市に招へいし、2週間の滞在期間中、伊勢神宮をはじめとする日本の文化や工芸に触れてもらい、現地の人々とも交流しながら、その体験を今後の創作活動に活かしてもらうというリサーチレジデンスだ。公募により選ばれ来日した6組7人の英国人アーティストたちは、式年遷宮など伊勢神宮独特の文化や背景などについて学び、神宮の協力も得て正式参拝や神嘗祭の見学もするなど、大変貴重な体験を得ることになった。

そのほか、現地のアーティストたちとの意見交換を通じ、互いの文化について理解を深めるなど、充実した滞在となった。

これらは伊勢神宮をはじめ、地元の人たちの協力、とりわけ伊勢市役所の担当者たちの尽力により実現した。このように、文化を通して日英の人をつなぐ機会をつくり、相互理解を深め、強い信頼関係を結ぶことで、両国が多様性を尊重する社会を築いていくことが、「UK in JAPAN 2019-2020」の目指すところである。



揃いの白装束に身を包み、842人の参加者と一緒に関西へと綱を曳いた © Ise City, British Council Photo by Hakubun Sakamoto



英国を拠点とするアーティストを伊勢市に招へい。伊勢神宮正式参拝の日、内宮の御正宮の前で © Ise City, British Council Photo by Hakubun Sakamoto



神職の方から正しい参拝の作法を教わるアーティストたち © Ise City, British Council Photo by Hakubun Sakamoto

## 4

日本からイギリスへの贈り物  
～桜の植樹プロジェクト～

(一財)自治体国際化協会ロンドン事務所 所長補佐 阿部 祥也 (仙台市派遣)

## 桜の植樹プロジェクト

「日英文化季節」のプロジェクトの1つとして、長年にわたる日英友好親善とこれからの2国間の継続的な友好関係を記念するために、桜の植樹プロジェクトが進められることとなった。

このプロジェクトは英国全土に広がり、イングランド、北アイルランド、スコットランドおよびウェールズにある160を超える公園、ガーデンのほか、400以上の学校に桜の木が寄贈される。英国の広い地域に桜を植樹することで、両国民がお互いに親近感を持てる関係にしたという期待が込められている。植樹された桜は友好のシンボルとなり、その地域の現在から将来のコミュニティーによって、大切に育てられる。



リージェンツ・パークで植樹を行う関係者  
(提供：Sakura Cherry Tree Project)

この桜植樹プロジェクトは、一般社団法人日英協会と、毎年秋にトラファルガー広場で開催されるジャパン祭の主催者を中心に、プロジェクトチームを設立し、日本側のプロジェクトチームでは日本での資金調達を、英国側のプロジェクトチームでは、植樹場所の選定、木の調達などを進めてきた。

## 植樹セレモニー

2019年11月27日、ロンドン中心部にある王立公園のリージェンツ・パークで、桜の植樹セレモニーが開

催された。リチャード王子や長嶺安政駐英日本国大使、佐野圭作在英日本人会会長(当時)をはじめ、イギリス政府関係者、国会議員など総勢100数十人が出席し、「タイハク」5本と「ソメイヨシノ」30本が、公園内の小川沿いに植えられた。式典では、桜の寄贈を受ける地元の小学校の児童による「さくらさくら」の合唱も披露された。

「タイハク」は、日本では1927年に絶滅してしまい、その後イギリスから桜の研究者コリングウッド・イングラム氏が日本に送った接ぎ穂が根付いて開花したものとされている(公益財団法人日本花の会)。



植樹セレモニーで合唱する地元生徒

桜の植樹プロジェクトは、2019年秋から2021年冬にかけて実施される予定である。近い将来、「お花見」が英国全土で見られる日が来るかもしれない。



咲き始めのリージェンツ・パークの桜

## はじめに

福島県は、2011年の東日本大震災以降、英国とのつながりを深めてきた。

2012年、ロンドン・ケンジントン&チェルシー王立区の管理する公園、ホーランドパークの一角に「福島庭園」が整備された。「福島庭園」の名は、福島県を含む被災地の早期復興と英国から受けた支援への感謝の意を表して付けられたものだが、この庭園をきっかけに、県内自治体と英国との交流が新たに生まれることとなった。この交流の詳細については次記事（本宮市寄稿）をご覧ください。

県としては、2015年に内堀雅雄<sup>うちほりまさお</sup>福島県知事が訪英した際に福島庭園の記念式典に参加したほか、2018年には庭園名プレートを寄贈するとともに、ロンドンで県産農産物のプロモーションを実施した。また、2004年度から2005年度および2017年度以降、クリアロンドン事務所に県職員を派遣し、県事業の現地でのサポートや県人会との連携を図っている。

現地県人会組織の「ロンドンしゃくなげ会」も震災以降、福島県の復興に向けて活発に活動しており、毎年ロンドンで夏に開催される「ジャパン祭り」では県産品の魅力をPRするブースを出展している。

このように、さまざまな角度から英国と交流を続けている福島県だが、今回は英国内大学との連携事例について紹介したい。

## UCL との覚書締結

2015年の知事訪英をきっかけに、本県とユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）は国際交流の進展や情報発信の促進等に向けた覚書を締結し、連携を図ることとした。とりわけ本県は、原子力発電所の事故による風評という大きな課題を抱えており、世界有数の大学であるUCLと連携して、復興の現状や福島県の魅力を発信することで風評払拭を図っている。具体的には、2015年度・2017年度にはUCLの学生らが本県の被災状況を視察し、2016年度・2019年度には県職員や県内高

校生がロンドンで情報発信活動を行うなど、相互に訪問することで交流を深めている。

## UCLで福島県の“今”を伝える

2019年7月の訪問では、UCLとの共催でシンポジウムおよびレセプションを開催した。

シンポジウムでは、学生や教職員のほか、企業や団体、ロンドン市民の皆さんを前に、県広報課の高橋和司<sup>かずし</sup>課長が「福島県の今」と題してプレゼンテーションを行った。高橋課長は、2011年の大震災および原発事故以降、福島県内では、飛散した放射性物質を取り除く「除染」が懸命に行われ、その結果、放射線量は世界の主要都市と変わらない水準まで下がっていることを説明するとともに、食品の安全対策として、県では1kg当たり50ベクレルという国際的にも厳しい基準で検査を行っており、基準を超えたものは一切流通させない体制を徹底してい



シンポジウムでの福島県プレゼンテーションの様子



プレゼンテーションに耳を傾けるシンポジウム参加者



福島魅力を伝える県立福島高校生徒のスピーチ

ることなど、福島の安全・安心や正しい状況を伝えた。

その後のレセプションでは、県立福島高校の生徒3人が地元の農産物や文化を紹介、復興状況のスピーチを行った。1年生の矢吹ももこさんは、人気の観光地である会津の「鶴ヶ城」や福島を代表する果物の桃をPRしたほか、2年生の高島元希さんは福島の米や野菜の安全性と美味しさを紹介し、同じく2年生の國井朗光さんは、福島は全国的にも合唱が盛んであり、音楽が復興を支えたことなどを伝え、参加者からは大きな拍手をいただいた。



果物を使った加工品や菓子など県産品の試食

また、会場内では、全国新酒鑑評会で7年連続金賞受賞数日本一を達成中の本県日本酒のほか、加工品や県産の菓子を振る舞うなど、福島の魅力を広くPRした。参

加者からは、「福島の本当の現状を知ることができてよかった」、「福島に行ってみよう」、「こんなに美味しい日本酒は初めて」など温かいお言葉をいただくことができ、風評払拭のみならず、福島のファン獲得につながる素晴らしい機会になった。



全国で高い評価を受ける本県日本酒の試飲

## おわりに

世界には福島に対する誤解や偏見がまだまだ残っているが、風評の払拭に向けては、科学的根拠に基づく発信を粘り強く続けることが重要だと考えている。特に今回の事例のように、現地の大学や企業等と連携することで、「より届く、伝わる」発信が可能になると感じており、県としては、UCLをはじめ英国の皆さんと良い関係を築きながら、「福島の今」を引き続きお伝えしていきたい。

## 英国との交流のきっかけ

2015年2月に英国のウィリアム王子が本宮市のスマイルキッズパークを来訪され、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故により被災した子どもたちを元気づけてくださった。

スマイルキッズパークは、復興と子どもたちの体力向上を目的に整備された施設である。市では後に、愛称として『プリンス・ウィリアムズ・パーク』を使用することについて英国王室からご公認いただいた。



ウィリアム王子の本宮市訪問

## 姉妹庭園覚書締結

同年7月に英国ロンドンで福島庭園3周年記念式典が開かれた。福島庭園は、震災からの早期復興を願ってケンジントン&チェルシー王立区ホランドパークに造られた庭園である。内堀福島県知事も出席された福島庭園3周年記念式典で、当時のケンジントン&チェルシー王立区長から「福島に英国庭園を」との提案があり、現地県人会組織であるロンドンしゃくなげ会の満山喜郎会長をはじめ多くの関係者のご尽力を経て、プリンス・ウィリアムズ・パーク内に英国庭園を整備することになった。

英国庭園完成に先立ち、2017年7月に高松本宮市長を団長とする「未来へつなげる もとみや英国訪問団」が渡英し、福島庭園と英国庭園の間に姉妹庭園の覚書を王立区と締結した。締結式では、鶴岡公二特命全権大使(当



福島庭園・英国庭園姉妹庭園覚書締結  
(左から、鶴岡公二特命全権大使(当時)、マリー・テレーズ・ロッシ区長(当時)、高松市長)

時) 立ち会いのもと、マリー・テレーズ・ロッシ区長(当時)と高松市長が覚書に署名した。両庭園を「強く永久的な友好のシンボル」と位置づけ、ケンジントン&チェルシー王立区と本宮市が友好と協力を促進することを約束した。

## 英国庭園開園

同年11月、英国庭園が完成した。その開園式では、福島庭園・英国庭園の日英両国の関係者が多数出席し、日英友好の懸け橋となる庭園の開園を祝福した。ポール・マデン駐日英国大使がウィリアム王子からのメッセージを披露された。



プリンス・ウィリアムズ・パーク英国庭園開園式  
(左から、根本匠衆議院議員、ポール・マデン駐日英国大使、高松市長、内堀雅雄福島県知事、レディ・ポーリック前英国下院議員、林景一最高裁判所判事(元駐英国特命全権大使))



高松市長ともとみや国際交流親善大使  
(左から、レディ・アーノルド グレーターロンドン副統監、  
レディ・ボーリック前英国下院議員、高松市長、ロバート・  
フリーマン元ケンジントン&チェルシー王立区長(現同区  
議会議員)、満山喜郎ロンドンしゃくなげ会会長)

また、チャールズ皇太子、メイ首相(当時)、ジョンソン外相(現首相)からもお祝いのメッセージをいただいた。これらのメッセージは、現在英国庭園内に記念碑として披露されている。

## もとみや国際交流親善大使の委嘱

2019年6月、英国庭園開園記念イベント「英国庭園フラワーフェスティバル」において、英国の各方面において活躍をされている関係者を「もとみや国際交流親善大使」として委嘱した。英国との関係を強化するとともに、大使には本市の魅力や情報を発信していただきながら、知名度とイメージの向上を図っていく。

## 「未来へつなげる もとみや英国訪問団」

「未来へつなげる もとみや英国訪問団」に市内中学生や市民が参加し、過去3回にわたり王立区や在英日本国大使館、UCL(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)などを訪問している。

王立区内にあるホランドパーク・スクールと英国オリンピック委員会パラリンピック委員会教育プログラム「Get Set (ゲット・セット)」参加校のダヴェナント・ファウンデーション・スクール2校の生徒たちと昨年行った交流は、参加生徒にとって大変有意義な体験となった。



ホランドパーク・スクールの生徒と日本文化交流

## 今後の交流について

本宮市は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会において英国を相手国とする「復興ありがとうホストタウン」になっている。大会期間中には英国の生徒を本市に招き、市内生徒たちとの交流事業を予定していた。新型コロナウイルスの影響により大会が延期となってしまったが、引き続き有意義な交流に向けて調整を続けていく。

本宮市は、過去幾度となくさまざまな災害に見舞われてきたが、英国との交流を通して国内外に本宮の元気を発信しながら、グローバル人材の育成と地域の活性化、そして災害からの復興につなげていきたいと考えている。



ダヴェナント・ファウンデーション・スクールの生徒と交流する本宮市の生徒

## 友好都市締結の経過

関東平野の北部・里山に囲まれた窯業の町「益子町」。英国コーンウォール州半島の北海岸・芸術的伝統が受け継がれる町「セント・アイヴス」。

「益子とセント・アイヴス」の友好の起点になったとされているのは遡ること1920年。濱田庄司とバーナード・リーチの二人の青年が、夢を抱き日本から英国セント・アイヴスに渡り、西洋初の東洋式登り窯を築き、リーチポタリーを開窯したことから始まっている。リーチはセント・アイヴスを拠点に洋の東西を股にかけて活躍し、その制作の場であるリーチポタリーは陶芸の聖地と目されるようになった。濱田はその後、益子町に居を構え、日本を代表する陶芸家の一人として、また民藝運動の主導者の一人として日本のみならず世界中を指導に回りつつ、同時に益子焼の近代化を牽引した。リーチが西洋社会に濱田の活動を紹介したことも、益子焼が世界的な知名度を誇ることになったきっかけとなった。二人の友情が、その後の両地の窯業および文化発展の起



英国（セント・アイヴス）リーチ工房

因であるとも言える。濱田とリーチがともに没した後も益子とセント・アイヴスの結びつきは続いている。

## 交流事業の取り組み

### 文化・経済交流事業

#### (1) 益子町の取り組み

2つの町が2012年に友好都市を締結し、今年で8年目を迎える。その間、英国ロンドンにて、益子焼を軸とした伝統工芸品のPRとインバウンド誘客促進



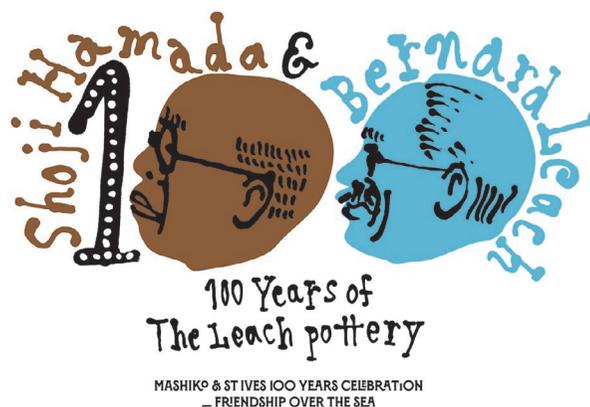
益子×セント・アイヴス友好都市締結 2012年9月20日

を目的としたトップセールスプロモーションを行っている。交流事業としては、2014年5月より「益子国際工芸交流事業（アーティスト・イン・レジデンス）」として、互いの地の作家を招へいし、芸能文化の発展と底上げを目的とした交流を今も続けている。

#### (2) 「益子×セントアイヴス100年祭」

そして、2020年の今年、濱田庄司とバーナード・リーチがセント・アイヴスに渡って100年を迎えるセレモニーイヤーとして「益子×セントアイヴス100年祭」と名付け、町を挙げてこれを祝う事業を立ち上げた。この「100年祭」を通して、二人が築いた友情の輪が益子とセント・アイヴスの歴史や陶芸の発展に大きな影響を及ぼしたことを再認識し、交流のさらなる発展を育む機会としたいと考えている。そして、益子とセント・アイヴスの100年の歴史や想いをより多くの人々に知っていただくことで、この事業がその先の「100年」へと続き、実り多きものとなることを願っている。

※「新型コロナウイルス」の影響を鑑み「益子×セントアイヴス100年祭」は2021年への延期を決定している。



益子×セントアイヴス100年祭ロゴ

### 次世代を担う若者（中学生）の交流事業

#### (1) 派遣概要

セント・アイヴスと友好都市を締結した年から、毎年11月上旬に中学生の派遣団（町内中学生12人、引率者2人）をセント・アイヴスに派遣し、現地の人々と交流

をしている。派遣の目的は、「海外の風土・歴史・文化などを見聞し、そこで生活する人々とのふれあいをとおして、国際感覚を養う」ことである。



リーチ工房で作陶体験

## (2) 活動内容

派遣時には、ギルドホールを訪問し、友好都市締結の意義を学んだり、バーナード・リーチが制作の場としていたリーチ工房を見学し作陶体験をしたりしている。

滞在中は、ホームステイをしてホストファミリーと現地を観光したり、食事をしたりして、日本とイギリスの生活や文化の違いを体験している。団員は、日本または益子町ならではのお土産や写真などを持参したり、日本食をふるまったりして、異文化交流を深めている。

また、セント・アイヴス・スクールを2日間訪問し、日本文化や学校生活の様子を紹介したり、現地中学生と

共に授業体験をしたりして交流をしている。授業は家庭科や体育、技術など交流できる授業や、日本にはない自分たちで寸劇を作り演技する授業、グループ活動など団員が参加しやすい授業を毎年設定してくれている。セント・アイヴス・スクールの生徒たちは、温かく迎え入れたり、積極的に話しかけてくれたりする。団員にとってセント・アイヴス・スクールでの経験はとても貴重なものになっている。



セント・アイヴス・スクールで生徒どうし誘導ゲーム

## (3) 派遣担当者からの一言

この派遣をとおして、次世代を担う若者たちが新たな交流の歴史を積み重ねていることは大変喜ばしく、益子町の代表としてセント・アイヴスとの絆を深め、歴史の一員となった誇りを胸に今後も活躍してくれることを期待している。



セント・アイヴス・スクールで生徒たちと記念撮影

## アバディーン市との海洋産業と エネルギー政策での連携関係の構築

英国・アバディーン市はスコットランド第3の都市であり、1975年に北海油田が本格採掘されて以降、北海における石油・天然ガス採掘の拠点都市となり、採掘に由来する海洋産業が発達し、海洋産業クラスターを形成している。

2016年9月に海洋産業の先進都市として神戸市職員が現地視察し、2017年9月には「神戸市海洋ビジネスコーディネーター」（北海周辺地域）としてアバディーン市在住の中尾真美氏を選任し、それ以来アバディーン市との交流を深めてきた。

2018年6月には久元市長がアバディーン市を訪問し、海洋産業関連ビジネスや当該関連人材育成、水素およびその他の再生可能エネルギー分野における相互連携を進めていくことを目的に「神戸市とアバディーン市との意思確認書」へ署名を行った。その後の協議により、2019年1月にアバディーン市長が来神し、その際に「アバディーン市と神戸市との覚書」に発展した。



アバディーン市と覚書締結

また、2018年6月に本市の訪問団がアバディーン市を訪問した際には、同市に所在するロバート・ゴードン大学の学長とも、将来を担う人材が学ぶ機会の創出に連携して取り組んでいくことを確認する「意思確認書」を交わした。



ロバート・ゴードン大学と意思確認書締結

これに基づく連携の第1弾として、2018年9月に、北海周辺地域の海洋に関する知識や最先端の海洋産業関連技術に触れる「神戸市スコットランド・サマープログラム」をロバート・ゴードン大学において初めて実施し、2019年9月も引き続き、世界に目を向け海洋に興味を持ってもらうきっかけとして、6人の学生がロバート・ゴードン大学で海洋産業について学んだ。大学での講義だけでなく、世界中の海洋産業に関わる企業が参加するイベントの「オフショア・ヨーロッパ」や水中ロボットを開発するROVOPなど地元企業も訪問し、海洋産業に関わる現場の話や最先端の技術について聞くことができた。

なお、2年連続で参加者たちはアバディーン市庁舎にも訪問させていただき、バーニー・クロケット市長自ら紅茶をふるまっていたが学生たちはとても感銘を受けた。



ロバート・ゴードン大学でドリルのシミュレーターを使った講義



地元企業の ROVOP 訪問

## エネルギー政策での都市間連携

本市ではエネルギー先進都市を目指し、再生可能エネルギー導入促進や世界初となる水素エネルギーの実証事業への支援など、さまざまなエネルギー施策に取り組んでいる。このような先進的な取り組みを一層進めるため、エネルギー業界の知識・ノウハウの共有や都市間のネットワーク形成を目的に、アバディーン市も加盟する世界のエネルギー都市の自治体ネットワーク World Energy Cities Partnership (WECP) への加盟に向け手続きを進めてきた。

2019年9月にアバディーン市で開催された WECP の会合に久元市長も参加し、ボードミーティング（総会）において、加盟の可否を決定する投票が行われ、出席者全員の賛同を得ることができ、日本の自治体では初となる加盟が認められた。WECP には 2019年9月20日現在で 16 개국 20 都市が加盟している。アバディーン

市、アメリカのヒューストン、中国の大慶、オーストラリアのパースなどこれまでの加盟都市は石油産出で有名な都市がほとんどだが、今は再生可能エネルギーや水素などへの転換が図られており、本市は石油産業ではなく、先進的な水素の取り組みを評価いただいた。



アバディーン市庁舎で開催された WECP の総会

同時期に開催された WECP の事務方会議では谷口企画調整局長が参加都市のメンバーに本市における水素エネルギーの取り組みについて講演し、他都市のエネルギー政策についても情報を交換した。

今後も年に2回ある総会や、メンバー都市との情報交換を通して、世界のエネルギー政策について情報収集するとともに、本市のエネルギー政策について国際的に発信していく。



事務方会議での谷口局長のプレゼンテーション